

コウカルチャーとしての女性文化

足立 恵子

1. 序 論

特にアメリカで盛んな異文化コミュニケーション領域での女性に関する研究においても、女性内部に文化集団が存在するという認識が持たれるようになってきた。女性内部に存在する文化集団とは何か、その文化集団同士はどのように関わっているのか、などの問題に取り組む優れた研究が、具体的な文化集団を検証する形で行われるようになってきた。女性内部の文化集団に着目した論文は、今まで研究の対象となり得なかった、有色人種の女性、レズビアン女性等を、研究の対象としたという点で意義のあるものである。

しかし、女性内部の文化集団の差異に着目した研究は、様々な女性の置かれた状況に対する認識を深めると同時に、女性全体のあり方を見失う危険性を伴うことも否定できない。差異を強調することが逆に、どのような立場にしろ女性であるという理由で「主流」文化の中で同じ位置に置かれていることを覆い隠すものになりかねないからである。さらに、文化集団間の力の不均衡に目を向ければ向けるほど、「主流」文化の中で同じ立場に置かれているはずの、自分たち以外の文化集団に対する共感が薄れ、さらには摩擦を引き起こす可能性がある。

本稿ではあえて女性を一つの文化集団と見なし、「主流」文化の中で他の文化集団と同じ位置に置かれているということを論じていきたい。人種上、または障害者等の文化集団は、「主流」文化の内部に存在する「コウカルチャー」(coculture)と異文化コミュニケーションの研究領域では名付けられているが、女性もまた同様に一つのコウカルチャーであるということを、主に女性以外のコウカルチャーに関する研究に基づいて論じていきたい。

2. 「コウカルチャー」の定義

「コウカルチャー」という一般にはなじみの薄い概念が、Samovar & Porter

編著の *Intercultural Communication* (以下略して *IC*) に章の表題として最初に掲載されたのは第6版(1991)であり、かなり最近の用語である⁽¹⁾。むしろ「サブカルチャー」という用語が *IC* の第1版(1972)から使われており、「サブカルチャー」という概念が成熟して「コウカルチャー」として捉えられるまでに、二十年近くの歳月が必要だったといえる。

2節では「コウカルチャー」の定義付けをしたいが、その前に「カルチャー」自体の定義を確認しておきたい。異文化コミュニケーション研究の入門書において、Lustig & Koesterは「カルチャー」を「信条、価値、規範について、ある集団の中で共有されている知覚を学習したのものの集合体であり、比較的多数の人々の行動に影響を与えるものである。」(筆者訳) [1993 41] と定義している。本稿では、Lustig & Koesterの定義を援用し、また「文化」という日本語を同義の概念として使用していくこととする。

「コウカルチャー」という概念がまだ存在しなかった頃、Sitaram & Cogdell は「サブカルチャー」を次のように定義しており、本稿における「コウカルチャー」の定義として援用したい。すなわち、「大きな文化、あるいは小さな文化においても、その中で一つか二つの異なる価値を持つ集団をサブカルチャーと分類する。この場合、文化の違いは全く別の文化と認定するほどではない。」(筆者訳) [1976 28] という定義である⁽²⁾。Lustig & Koesterは、「サブカルチャー」あるいは「コウカルチャー」の定義をアフリカ系アメリカ人⁽³⁾等の民族集団に限定し、「コウカルチャー」が「サブカルチャー」に替わって使われるようになってきている理由を、「副次的な」(サブ)という意味を含む「サブカルチャー」という用語を用いると、アフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人等の文化がヨーロッパ系アメリカ人⁽⁴⁾の文化より副次的あるいは下位の位置にあるという意味合いを持ちかねないためと、説明している [1993 48]。「コウ」という接頭語には「共に」あるいは「同位の」という意味があり、本稿においても、どの文化も他のどの文化とも同じように価値があり尊重されるべきであるという理念を尊重し、「コウカルチャー」という用語を採用する。また、適切な日本語訳がまだないため、英語の音を表記したカタカナ語で言い表すことにする。Lustig & Koesterは「サブカルチャ

一」あるいは「コウカルチャー」の定義を民族集団に限定しているが、Sitaram & Cogdellは民族集団には特に限定していない。*IC*においてもやはり民族集団以外に、女性、貧困者、高齢者、障害者、ゲイ、レズビアン等の、様々なコウカルチャーが取り上げられている。本稿においても*IC*と同様に、主流文化の内部に存在する文化は、民族集団の文化に限定せず全てコウカルチャーとして認識していきたい。

またここで、「主流文化」とは何かも明らかにしておきたい。「主流文化」の定義は、「コウカルチャー」の定義の中に間接的な表現ではあるが何うことができる。Lustig & Koesterは「サブカルチャー」または「コウカルチャー」の定義の中で、「より大きな文化と何らかの点で共通性があり、別の文化と共通の国家を共有している。」(筆者訳) [1993 48]と述べており、また、アフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人等の民族集団が「アメリカ合衆国のモザイクを作り上げている」(筆者訳) [1993 48]と記している。「アメリカ合衆国」や「国家」という表現から推察できるように、「主流文化」とは「国家の中で政治的、経済的に主流となっている文化」と定義できる⁶⁾。

さらに、共存するという意味合いを込めた「コウ」という接頭語を持つコウカルチャーが何と共存するかについても、Lustig & Koesterの記述を基にして考えてみたい。「われわれのますます狭く、相互依存的な世界では、ほとんどの文化は他の文化と共存しなければならない。」(筆者訳) [1993 48]という記述において、「文化」には「サブ」、「コウ」、「より大きな」といった接頭語はついていない。したがって、コウカルチャーは主流文化、他のコウカルチャーを含む全ての文化と共存しようという理念を持たせられた概念であると想定することができる。

3. コウカルチャー間の共通性

3.1 コウカルチャーに属する人々の「他者性」

3節では女性が他のコウカルチャーに属している人々と共通する点を、「他者性」及び「他者性」の克服過程の二点から指摘していきたい。「他者性」という概念は、古代ギリシャ哲学まで遡れる一般的な概念であるが、西欧の

実存主義の哲学においてしばしば扱われた。本稿では、実存主義の哲学者であり女性の他者性について考察した、ボーヴォワールの『第二の性』における「他者」の定義から、「他者性」の定義を援用したい。

ボーヴォワールは、女とは何かという問いに取り組む中で、「主体」と「他者」という対立概念で男と女の間を捉えることが最もふさわしいと考え、「主体」と「他者」を次のように定義している。「主体は対立することによってのみ、自己を定める。つまり主体とは、自分を本質的なものとして主張し、他者を非本質的なもの、客体にしようとするものなのだ。」[1997 I 12]。「他者性」の定義を援用するためにあえてボーヴォワールを持ち出した理由は、「他者」の定義そのもののの中に、自分以外の存在を「他者」として対立するという、「他者性」の克服のための方策が述べられているからである。

ボーヴォワールは男と女の間を「主体」と「他者」の間で捉えているが、「女＝他者」という主張を取り返しのつかない絶対的な真実として述べているわけではない。「であるとは、なったということ、つまり現にあるように作られたということである。」[1997 I 20]という言説にも現われているように、ボーヴォワールは『第二の性』全体を通し膨大な資料と強靱な理論を駆使して、何故女が「他者」にさせられてきたのかを論証している。したがって、ボーヴォワールが、女性以外の他者、例えばプロレタリアやアメリカの黒人がブルジョワや白人と主体と他者の立場を逆転させることができるのに対して、男性が本質的な主体として確立し女性は純粋な他者になっていると主張する時も、女性の他者としての位置が如何に徹底して作られたものであるかを述べているのであって、女性は主体にはなりえないと断じているわけではないと捉えるべきである。女性が他者にさせられている理由として、ボーヴォワールは、「女たちが、他と対立することで自らを位置づけるような、一つの統一体として団結する具体的な手段を持っていないからである。」[1997 I 14]と述べている。具体的には「女は男たちのあいだに分散して生活し、他の女たちとのつながりより、住居や仕事、経済的利害、社会的地位などによる、特定の男性——父や夫——とのつながりの方が密接である。」[1997 I 14]ことを挙げている。女性が一つの統一体になっていないという

ボーヴォワールの指摘は、女性の他者性の克服を考える上で重要な示唆になると考えられる。

女性が如何にして他者性を克服するかについての議論は4節で行うこととし、ここではアメリカの異文化コミュニケーションの領域における研究に視点を戻し、*IC*に掲載されている女性以外のコウカルチャーを扱った論文から、他者性の概念がコウカルチャーに属する人々の感じるものとして多くの論文で取り上げられていることを指摘していきたい。アメリカにおける少数民族の問題を扱った論文の中で、Madridは自分自身の抱いてきた「他者性」の感覚を「存在が目立っている」と「存在が見えない」という相反する概念から捉えている[1994 128-129]。メキシコ系の少数民族出身であるために、アメリカ社会の中で高等教育機関に進めば進むほど、自分のことを「よそのもの」であると感じてきたとMadridは述べている。「よそのもの」であるとは、例えば外見、話し方、行動の仕方、存在の仕方そのものからも、自分が奇異なものとして「存在が目立っている」ので排除されていると感じると同時に、その場に存在しているのにあたかも存在していないように見なされることである「存在が見えない」ことをも意味する、と説明している。さらに、Madridはアフリカ系アメリカ人等の少数民族と女性の問題が同じであることにも言及している。

他者性を言い表すためにMadridが用いた「存在が目立っている」と「存在が見えない」という概念は、権力と支配について論じたFolbの論文によっても扱われ、コウカルチャーに属する人々に共通して当てはまると述べられている[1997 141-142]。Folbは、有色人種、女性、ゲイ、障害者、高齢貧困者のような被支配集団の人々は、「存在が見えない」と同時に「目立つカーサートの印」を付けられている、と述べている。「存在が見えない」というのは、支配者側からは存在しないものと見なされているので、存在しているのに意識されないという意味であり、「目立つカーサートの印」というのは、例えば、ジェンダー、人種、年齢、障害の程度に関するもので、人々は一生目に見える形でのカーサートの印を付けられている、とFolbは説明している。

アメリカにおいては社会の様々な位置からの改革、また個人の努力によっ

て、コウカルチャーに属する人々が被る社会的な不利益は次第に少なくなっている。それにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、主体性を確立できず他者性に悩まされる状況が生まれている。Hecht, Ribeau, & Albertsは、アフリカ系アメリカ人が民族的な文化背景とアメリカの主流文化の同化圧力の狭間で悩む状態を、「意識の二重性」と名付けている[1989 407]。「意識の二重性」とは、音楽や踊りといった自分たちの文化的な伝統を大切にしたいと思う一方、経済的に生き残るための必要性などから、主流文化に合わせて生きていかざるを得ないとも感じるようなアフリカ系アメリカ人の意識を指す、としている。女性には言及されていないが、意識の二重性は他の多くの被支配集団にも当てはまるとされている。

意識の二重性を表す具体例としてHecht, Ribeau, & Albertsが挙げた「間接的なステレオタイプ」[1989 392, 401]は、現代の日本社会に生きる女性にも当てはまることなので、ここで取り上げてみたい。アフリカ系アメリカ人の「間接的なステレオタイプ」とは、例えば、白人がスポーツや音楽のようなアフリカ系アメリカ人的な話題について話しかけてくる時、そのアフリカ系アメリカ人は、白人が共通の話題を見い出そうとしている好意は分かるのだが、それと同時に白人に支配されているようにも感じることでであると説明されている。また別の間接的なステレオタイプの例としては、ある話題について白人にアフリカ系アメリカ人としての意見を求められた時に、アフリカ系アメリカ人全体の意見を代表させるのではなく、一個人として意見を求めて欲しいと思う気持ちが挙げられている。

Hecht, Ribeau, & Albertsの挙げた二つの間接的なステレオタイプの例を現代の日本社会に当てはめ、アフリカ系アメリカ人を女性に、白人を男性に言い替えてみよう。男性が家事や育児といったいわゆる女性の話題について話しかけてくる時、女性は、男性が共通の話題を見つけようとしている好意は分かるのだが、それと同時に女性の話題の領域に追い込まれ、他の分野への関心を閉ざされているように感じると想像できる。また、女性の視点からの意見を男性から求められた場合も、女性だからといって全ての人が同じ意見を持っているわけではないから、女性の意見と固定化せずに一個人として

意見を求めて欲しい、と思う女性もいると想像できる。さらに、Hecht, Ribeau, & Alberts の述べた意識の二重性の問題自体、現代の日本社会に生きる女性に当てはめることができる。例えば、経済力をつけて生き残っていくために、主流文化の価値観を受け入れ男性と同じように労働をしていかなければならないと思うと同時に、育児や衣食住といった多くの女性が担ってきた、生活に基づいた生き方を大切にしたいという気持ちも捨て切れない、と感じる女性は存在するだろう。主流文化と女性文化のどちらも捨て難いと感じ、自己の意識が二つに引き裂かれる痛みに悩む女性は存在するだろう。

3.2 コウカルチャーに属する人々の「他者性」の克服過程

3.1で述べた、コウカルチャーに属する人々が直面する他者性だけでなく、他者性を克服する過程においても、コウカルチャー間で共通性が見られる。ここでも *IC* に掲載された論文に基づき、様々なコウカルチャーに一貫して、他者性の克服過程が「自己否定」から「自己肯定」への二段階を経ることを考察していきたい。

権力と支配を論じた論文の中で、Folbは他者性の克服過程の二段階を「パッシング」と「カム・アウト」と名付けているが[1997 142-143]、この二段階は「自己否定」から、「自己肯定」への過程であると言えるだろう。Folbによると、「パッシング」⁽⁶⁾というのは、例えば、有色人種が白人の振りをするというような自己否定を意味するが、それは「白人が正しい」というその社会に支配的な価値観を有色人種が受け入れ、白人に近づけば近づくほど自分たちの社会的な地位が高くなると思うことをも含む。それに対して「カム・アウト」とは、自分に付けられたカーストの印を意識的に受け入れ、自己のアイデンティティを積極的に主張することである、とFolbはしている。もともと「カム・アウト」とはゲイあるいはレズビアンが自分の性的志向性を公言する時に用いた用語であるが、全ての被支配層の人々に通じるものとFolbは考えて、「黒人は美しい」、「ゲイの自信」、「姉妹愛は強力だ」(筆者訳)[1997 143]のような解放運動におけるスローガンを、自己の肯定的な受容を示す例として挙げている。

Folbが主張したのと同じ自己否定から自己肯定への過程を、メキシコ系アメリカ人であるMadridは自分自身の成長の過程として述べている[1994 128]。自分の人生の前半は、アメリカ人になることを強要してくる学校という組織の中でスペイン語ではなく英語を話すように努めるなど、少数民族出身であることをやめてアメリカ人になりきろうとし、自分の他者性を示すものを打ち消すことに費やしてきたという。しかし自分の人生の後半は、何故自分たちの存在が社会の中で見えないものになっているかを解明し、逆に自分たちの他者性を周りのアメリカ人に理解してもらい、自分たちの存在を当然のものであると見なしてもらえるように努力してきたと、Madridは述べている。

カム・アウトという用語がもともと生まれたゲイに関する論文の中で、Majorsはカム・アウトに至る過程をFolbやMadridと同様に自己否定から自己肯定への二段階で捉えている[1994 166-167]。Majorsによると、ゲイやレズビアンは自分の性的志向性を隠して生きるために、否定的な自己イメージを抱き、自分の性的志向性が周囲に知られることを恐れる自己混乱の時期を経験する。しかし、多くのゲイやレズビアンは自分を隠していくことが健全ではないことに気付いて、自分の性的志向性を周囲に対して明らかにしていこうとし、さらに新しい家族や共同体を自ら作っていくとMajorsは述べている。

Braithwaiteは、障害者の自己肯定を「再定義」という用語で捉えていくつかの提言をしている[1997 158-162]が、この提言は、障害者であることで持たざるを得なかった自己否定的な意識を、自己肯定的に変えようとすることを意図している。提言では、障害者であることを一つの新しい文化であると見なすこと、障害というのはある人が持っている様々な特性の一つであると他の人々に考えてもらうようにすること、そして社会全体の見方を障害者もまず人間であるというように変えていくことが挙げられているが、全ての提言は障害者の自己肯定的な認識を目指している。Braithwaiteはこの提言の中で、障害の持つ意味は人種や性と同じであると付け加えている。

女性を扱った論文の中でも、女性自身のパッシングについて述べられているものがあり、Pearsonの指摘する問題点[1988 161]から、パッシングが女性にとっても自己否定に過ぎないということが伺える。Pearsonは現代社会

では多くの女性が男性として通用しようとしており、社会的に成功した女性経営者の中には男性的な性質を持つ人が多いが、女性が決して最上層部に行き着くことはなく、むしろ女性的な部分を捨てることで職場での成功よりもはるかに多くのものを失っているかもしれないと述べている。例えば、男性特有だった心臓病や癌が女性にも増えていることから示されるように、男性の価値観をそのまま受け入れることをはたして女性自身が望んでいるのかを考えなくてはならないというPearsonの指摘は、自己否定であるパッシングでは他者性の克服はできないことを示唆している。

女性について述べたPearsonの論文は当然ではあるが、ここで取り上げた所論は全て主語を女性に置き替えることによって、現代の日本においても妥当性のあるものになりうる。男性中心の企業組織で働き続けていこうとする場合、女性は自分に対する低い評価を自ら受け入れ、男性と同じ価値観を持つようとする。しかし、それでは自分が感じている他者性は変わらず、むしろ自己否定を内在化しているのにすぎないことに気付く時が来る。その時に初めて、自分が女性であることを肯定的に捉え、無理に男性の価値観に自分を合わせる必要はないことを悟り、自分のありのままの存在を周囲に認めてもらえるように努力していこうとする。このような自己否定から自己肯定の段階を女性たちが経験しているということは十分推測できるだろう。

4. コウカルチャーとしての女性文化のあり方

コウカルチャーとしての女性文化のあり方を探っていくために、4節ではまず、女性を主流文化の中に存在する様々なコウカルチャーの一つであると指摘することの意義を、女性が他者性の克服に取り組む可能性と、女性が他のコウカルチャーに属する人々に対して共感を抱く可能性の二点から述べていきたい。女性が他者性の克服に取り組む可能性については、3.1で述べたボーヴォアールの言説を基に論じることができる。

女性を一つのコウカルチャーと見なすことの意義は、ボーヴォアールの言説で述べられた、女性が他者にさせられている理由を阻止することにある。女性が一つの統一体として団結していないという理由をボーヴォアールが挙

げたことから示されるように、女性文化が一つの文化であるという認識が持てないと、自分たち以外の者に対立するという意識が持てず、他者性の克服に取り組むことができない。女性文化内の差異の存在を強調し、女性の置かれた状況が一つではないことを強調すると、一つの統一体としての意識を女性が持つことを自ら放棄してしまうことになりかねない。自己の存在の他者性を克服するためには、一つの文化としてまとまり自分たち以外の者に対立することが必要である。女性を一つのコウカルチャーと認識することによって初めて、主体と他者との対立によって他者性の克服に取り組むという手段を女性は得ることができる。

女性を一つのコウカルチャーとして認識することは、さらに、女性が他のコウカルチャーに属する人々に対して共感を抱くことにも繋がる。女性が一つのコウカルチャーであるという認識が持てないと、他のコウカルチャーに属している人々も主流文化の中で自分たちと同じ立場に置かれているということに女性が気が付き得ない。コウカルチャー間の共通性が認識できないと、主流文化に対して同じ摩擦を経験している自分たち以外のコウカルチャーに属する人々に対して、女性が共感を持つことが難しくなる。

様々なコウカルチャーが主流文化の中で置かれた立場が同じであるということ認識できず、他のコウカルチャーを貶めることによって自分たちの優位性を確立しようとしている例を、女性自体ではないが、アメリカにおけるアフリカ系アメリカ人の問題から取り上げてみたい。青木は、ラップ・ミュージシャンのアイス・キューブを例に挙げ、「黒人のもつ憎悪をむき出しに歌っている。憎悪の対象はユダヤ人や韓国人、ホモや女性である。」[1994 252]と報告している。このアフリカ系アメリカ人の例は、自分たちの生活状態が全く改善されないことに対する怒りがコウカルチャー間の力の不均衡を意識することに繋がり、そのために、主流文化に対しては同じ立場に置かれていないはずの他のコウカルチャーに属する人々に対して、共感を持つどころか自分たちの地位を脅かすものとして敵意を持つに至ったことを示すものである。他のコウカルチャーに対して共感を抱くことができないと、コウカルチャー間で争うことによって、主流文化の価値観は揺らぐどころか強化されま

すまず安定することになり、コウカルチャーに属する人々が他者性を克服することもますます難しくなる。

では、コウカルチャーとしての女性文化に属する女性が、他者性を克服するためにはどのような態度を持つことが必要なのだろうか。留意しなければならないことは、他者性を克服することが、女性文化が他のコウカルチャーもしくは主流文化より優位に立とうとすることを意味するものではないということである。女性が自分たちの主体とそれ以外の他者の間に相互性を認めなければ、また男性という新たに固定化された他者を生みだすにすぎなくなる。まして、全てのコウカルチャーに属する人々が自分たちの優位性を主張し始めたら、飽くなき主導権争いを永遠に繰り返すことになり、何らかのコウカルチャーが必然的に固定化した他者となり、主流文化に対する摩擦を感じる立場に陥ることになる。3.2で述べた「黒人は美しい」、「ゲイの自信」、「姉妹愛は強力だ」といったコウカルチャーの解放運動のスローガンは、主流文化の価値観のアンチテーゼとして考案された。だからといって、コウカルチャーの解放運動のスローガンは「白人は美しい」、「ヘテロセクシュアルは間違っている」、「男同士の友情は価値がない」というような主流文化の価値観の破壊を意図するものではないだろう。

女性が他者性を克服するためには、他のコウカルチャーあるいは主流文化より優位に立とうとするのではなく、如何に多様性を受け入れる態度を培っていくかを考える必要がある。Madridは「多様性」を「異なること、様々な形態を持つこと、標準化ではなく、秩序ではなく、均質ではないこと」（筆者訳）[1994 130]と定義している。すなわち、アメリカにおいては、人種、性的志向性、等における様々なコウカルチャーに対してその存在価値を認めていくことができるかどうか問われている。日本においては、例えば、部落差別、沖縄の問題、障害者、高齢者、在日外国人等々の点で、女性以外のコウカルチャーに属する人々が抱えている問題にも敏感になり、共感を持って受け入れていくことができるかどうかにかかってくる。日本の中で自分たちの存在を他者と感じ、自己否定を感じながらも、他者性から抜け出して自己肯定的に自分たちの存在を受け入れていこうと努力している姿は社会のい

たところに見られる。自分たちと同じ境遇にある自分たち以外のコウカルチャーの存在に気付き、その存在価値を受け入れることは、現実世界においてコウカルチャー間に力関係の差異があるような場合には実行することが難しいが、女性が他者性を克服するために必要な態度であるように思われる。

多様性が志向され「コウカルチャー」の理念が実現された状況では、男性文化も一つのコウカルチャーとして存在することになるだろう。現時点では男性文化も一つのコウカルチャーであると述べると奇異に響くかもしれない。なぜなら、今のところ主流文化に対する摩擦を経験するものとしての男性文化の存在は確認し難いからである。男性性を極度に強調した排他的な集団を除いては、男性が男性であるが故に他者性を感じ、主流文化の価値観に合わず自己否定に陥りそれを乗り越え自己肯定していくという、3節で述べた他者性の克服過程を経験するとは、少なくとも現代の社会においては考えられにくい。しかし、「コウカルチャー」の理念が実現され、全てのコウカルチャーに属する人々が自己を肯定的に捉えられるようになった状況では、男性文化も一つのコウカルチャーとして存在することが可能になるだろう。

5. 結 論

本稿では、女性文化を主流文化の内部に存在する一つのコウカルチャーとして捉えることによって認識できる女性文化と他のコウカルチャーとの共通点を、他者性、及び自己否定から自己肯定への他者性の克服過程の二点から指摘してきた。本稿の考察は、女性が他者性の克服に取り組む可能性と、さらに女性が他のコウカルチャーに属する人々に対して共感を抱く可能性を指摘するという意義を持つものである。主にアメリカにおけるコウカルチャーに関する論文を扱ってきたが、日本におけるコウカルチャーを含めてさらに多くのコウカルチャーの研究を取り入れ、女性文化内部に存在する差異を女性文化としてどう統合していくかについて、今後論を深めていく必要がある。コウカルチャー間の共通性を指摘した本稿が、女性文化のあり方を考えていく上で一つの示唆になることを願いたい。

注

- (1) 本稿では、論拠として取り上げるアメリカにおける異文化コミュニケーション研究の論文として、主にSamovar & Porter編著の*Intercultural Communication: A Reader*に集録されている論文を扱うことにする。ICは第1版(1972)以来改訂を重ね現在第8版(1997)まで出版されており、改訂の度に時代の流れに見合うような新しい論文に差し替えられている。本稿で主にICに集録されている論文を扱う理由は、ICが異文化コミュニケーション研究の盛んなアメリカの大学においても、異文化コミュニケーションの講座が開講されることの増えてきた日本の大学においても、入門書としては最もよく読まれているものの一つであるため、様々なコウカルチャーを均等に網羅しているという点で、コウカルチャー間の共通性の考察を目的とした本稿に、最もふさわしいと考えられるためである。
- (2) 例えば、アメリカにおける女性文化と日本における女性文化は共通性があることから、コウカルチャーという概念を主流文化に内包される文化とは定義せず、コウカルチャー間の共通性に重点を置いて定義する捉え方もある。しかし本稿では、主流文化とコウカルチャーが接触する際に起きる摩擦が主題であるため、コウカルチャーを主流文化の中に存在する文化と捉えるSitaram & Cogdellの定義に従うことにする。
- (3) これまで日本語で「黒人」を意味してきた英語における表現としては、“Blacks”に含まれる否定的な意味合いを避けるために、現在“African Americans”や“Afro-Americans”が使われるようになってきている。本稿でもその日本語訳である「アフリカ系アメリカ人」を用いるが、原文で「黒人」という表現が用いられている際には原文に従うことにする。
- (4) 「黒人」が避けられるべきなら、その裏返しの意味合いをもつ「白人」も同様に避けて「ヨーロッパ系アメリカ人」が用いられるべきだと考えられる。本稿でも、「ヨーロッパ系アメリカ人」を用いるが、原文で「白人」が用いられている場合には、原文に従うことにする。
- (5) 但し、日本やアメリカ合衆国のように、国家とその主流となる文化が一对一で対応しているような場合には本稿の定義で問題ないが、民族紛争等の理由により国家そのもの及び主流となる文化が流動的な場合には、必ずしも主流文化を国家の枠組みのなかで定義できないことを付け加えておきたい。
- (6) ゴッフマンのいうところの、ある社会の中での望ましい自己承認を求めるための印象操作の技法の一つであり、その社会において劣等性が説明されその結果様々な差別が行われる「スティグマ」が、外部に露見していない場合、その「スティグマ」を有していない者に成りすますために、情報隠蔽することを意味する[ゴッフマン 1973 120-149]。FolbやPearsonは、さらに押し進めて、その社会において支配的な価値観を内在化することをもパッシングの意味に含めている。

引用文献

Braithwaite, D. O. & Braithwaite, C. A. 1997 “Understanding Communication of

- Persons with Disabilities as Cultural Communication," in L. A. Samovar & R. E. Porter eds., *Intercultural Communication: A Reader 8th ed.* (Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company), pp. 154-164.
- Folb, E. A. 1997 "Who's Got the Room at the Top? Issues of Dominance and Nondominance in Intracultural Communication," in L. A. Samovar & R. E. Porter eds., *Intercultural Communication: A Reader 8th ed.* (Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company), pp. 138-146.
- Hecht, M. L., Ribeau, S. & J. K. Alberts, J. K. 1989 "An Afro-American Perspective on Interethnic Communication," *Communication Monographs*, 56 (December) 385-410.
- Lustig, M. W. & Koester, J. 1993 *Intercultural Competence*. New York: HarperCollins College Publishers.
- Madrid, A. 1994 "Diversity and Its Discontents," in L. A. Samovar & R. E. Porter eds., *Intercultural Communication: A Reader 7th ed.* (Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company), pp. 127-131.
- Majors, R. E. 1994 "Discovering Gay Culture in America," in L. A. Samovar & R. E. Porter eds., *Intercultural Communication: A Reader 7th ed.* (Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company), pp. 165-170.
- Pearson, J. C. 1988 "Gender and Communication: Sex Is More Than a Three-Letter Word," in L. A. Samovar & R. E. Porter eds., *Intercultural Communication: A Reader 5th ed.* (Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company), pp. 154-162.
- Sitaram, K. S. & Cogdell, R. T. 1976 *Foundations of Intercultural Communication*. Columbus, OH: Charles E. Merrill Publishing Company.
- 青木富貴子 1994『ジャーナリスト・アメリカ』文藝春秋
- ボーヴォワール, S. 1997 決定版『第二の性』I 井上たか子／木村信子監訳 新潮社
- ゴッフマン, E. 1973『スティグマの社会学』石黒毅訳 せりか書房